

# ふるさと見て歩き

第8回

郷校 時雍館跡



◀時雍館の跡(野口小学校内)

しました(表参照)。歴代藩主の中でもとりわけ九代藩主斉昭は教育に力を注ぎ、藩主在任中に集中的に郷校を設立しました。時雍館は六番目の郷校として弘化元(一八四四)年に建設され、斉昭の失脚によって開校が遅れましたが、嘉永三(一八五〇)年にはその活動を開始しました。また、市内にあったもうひとつの郷校、大宮郷校はその六年後に開校しました。

## ◆時雍館のテキスト

郷校での教育内容は四書五経(儒学で尊重される代表的な書物)、古事記や日本書紀などの国典、その他医学、武術と広い範囲に及んでいました。外庄の高まりの中で、学問と武術とのバランスは徐々に後者に移っていくようになりますが、水戸藩の学問としての教育は水戸学を基本としており、郷校である時雍館でもその理念に基づいた講義が行なわれました。

## ◆水戸藩の教育機関

野口小学校の校庭に「時雍館の跡」と刻まれた石碑が建てられています。時雍館とは、かつてこの地にあった庶民の子弟の教育機関、郷校のことです。

水戸藩では、藩士とその子弟の教育機関として藩校「弘道館」を天保十二(一八四二)年に開設しました。一方で庶民のための学問所としては文化元(一八〇四)年開校の稽医館(小川郷校)を皮切りに十五校が開校

水戸学とは、外国からの脅威が高まる中で、天皇の権威を背景とし、国家体制を強化することによって日本の独立と安全を確保するという思想を持った学問です。この水戸学を確立したのが会沢正志斎であり、尊

皇攘夷(統治者である天皇を尊崇し、異民族を打ち払う)運動の理念的な指導者と仰がれた人物です。正志斎の著書『新論』は当時の尊皇攘夷の運動家の座右の書として藩内外の人々に広く読まれました。

写真の『迪彝篇』は正志斎が特に時雍館の教科書として著したもので、「時雍館蔵版」の銘があります。藩内での時雍館にける熱意がうかがえます。郷校の教育は水戸学の強い影響を受けたもので、時雍館の館主となる人物もその先鋭的なリーダーという面を持っていました。時雍館の館主となった四人のうち、四代目の田中愿蔵は幕末水戸藩内の抗争における激派として著名な人物です。時雍館もこの抗争



▲会沢正志斎著「迪彝篇」(御前山教育事務所蔵)

表【水戸藩内の郷校一覧】

郷校名	開館年	所在地(現在地)
稽医館(小川郷校)	文化元(1804)	茨城県小川村(東茨城県小川町)
延方学校(延方郷校)	文化4(1807)	行方郡延方村(潮来市)
敬業館(湊郷校)	天保6(1835)	那珂郡湊村(ひたちなか市)
益習館(太田郷校)	天保8(1837)	久慈郡太田村(常陸太田市)
暇修館(大久保郷校)	天保10(1839)	多賀郡大久保村(日立市)
時雍館(野口郷校)	嘉永3(1850)	那珂郡野口村(常陸大宮市)
大子郷校	安政3(1856)	久慈郡大子村(久慈郡大子町)
大宮郷校	安政3(1856)	那珂郡大宮村(常陸大宮市)
町田郷校	安政4(1857)	久慈郡町田村(常陸太田市)
小菅(小里)郷校	安政4(1857)	久慈郡小菅村(常陸太田市)
秋葉郷校	不詳	茨城県秋葉村(東茨城県茨城町)
鳥羽田郷校	不詳	茨城県鳥羽田村(東茨城県茨城町)
玉造郷校	安政5(1858)	行方郡玉造村(行方市)
潮来郷校	安政3(1856)	行方郡潮来村(潮来市)
馬頭郷校	安政4(1857)	下野国那須郡馬頭村(栃木県那須郡那珂川町)

※瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』山川出版社1976年 7-8頁の表をもとに作成。

に巻き込まれて元治元(一八六四)年に焼失し、多くの資料が失われました。その後、慶応三(一八六七)年に最後の水戸藩主昭武(あきむ)によって再興され、同所に郡務局を置いて領内北部を管轄させました。しかしこれも四年後の明治四年には廃藩置県により郡務局が廃止され、時雍館は二十年余の歴史に幕を下ろしました。

時雍館で使用されたと思われる教科書類は『迪彝篇』を含めて計十九冊が残されており、御前山市民センターに展示されています。また、大宮郷校で使用された教科書も歴史民俗資料館大宮館で見ることができま

す。(歴史民俗資料館)